

北海道の盛土遺構

(公財) 北海道埋蔵文化財センター
福井淳一

1. はじめに

北海道では、縄文時代早期後葉から盛土遺構が形成される。その確認は1970年代に遡り、盛土、再堆積層、土器塚、捨て場、包含層、土器集中、そして貝塚などと呼称されてきた。近年、過去の調査例も含め、盛土遺構が積極的に認定され、各地・各時期の様相が明らかになってきた(村本ほか2014)。ここでは、北海道の盛土遺構を通時的に紹介する。

2. 盛土遺構の分類と分布

北海道の盛土遺構は、105遺跡で認定できた(福田・阿部・富永・福井2014)。認定条件は、調査で確認された廃棄物の集中した層のうち、土壌が目立つもの、厚さ数十cm以上堆積しているもの、焼土や炭化物・焼骨を多く含むもの、土器が完形・半完形状態で集積されているもの、とした。貝が目立つものは貝塚として、原則対象外とした。焼土が厚く、広く堆積した焼土遺構で、人為か自然か判断できないものや、遺物のみ集中するものも除いてある。

盛土遺構の堆積状態は、Ⅰ：廃絶住居埋土、Ⅱ：斜面盛土(斜面の捨て場と呼ばれる)、Ⅲ：楕状盛土(平板で厚さが均一)、Ⅳ：土手状盛土(断面山状になる)に分類できる。Ⅰは通常盛土遺構に含めないが、盛土遺構の初期形態であるので含めた。また平面形状からは、a：点在、b：面状、c：帯状、d：弧状、e：コ字形、f：環状に分類される。帯状は、一列と二列がある。分布

は、石狩低地帯より南西側に集中している。この傾向は縄文時代の遺跡分布と同じである。なお、次頁以降の遺構図の橙色の範囲が盛土遺構、青丸が土坑、茶色い円が住居跡を示す。

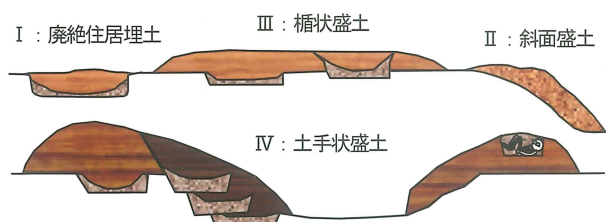


図1. 盛土遺構の堆積状態

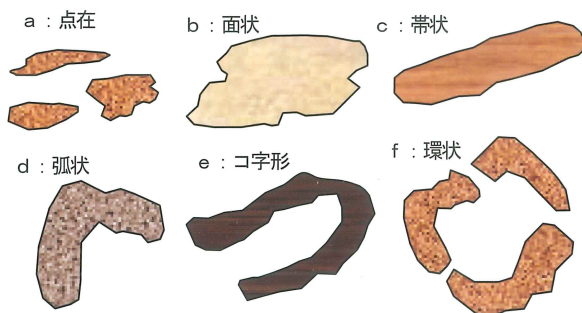


図2. 盛土遺構の平面形状

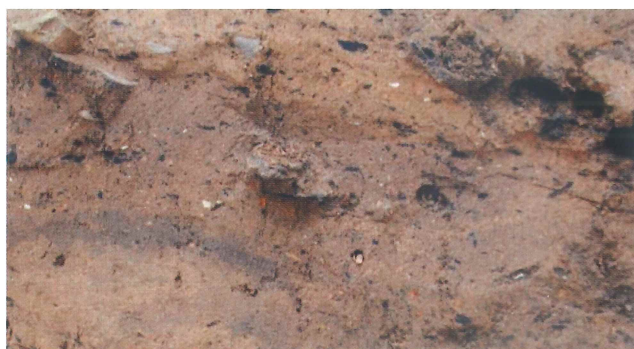


図3. 盛土層(福島町館崎遺跡)



図4. 盛土遺構の凹凸(福島町館崎遺跡)

3. 縄文時代早期の盛土遺構

定住生活に伴って、廃棄物や生活廃土を一定の範囲に集積するようになるようで、太平洋側の遺跡で点々と確認される。廃絶住居埋土や斜面盛土のほか、楕状盛土が形成されるが、小規模なものである。

中葉の^{なかの}中野 B 遺跡では、住居集中範囲から浅いが湧水のあった沢にかけて、楕状～斜面盛土が形成された。

末葉の^{こまがたけ}駒ヶ岳 1 遺跡では、土坑掘削時の廃土を集積したものが散在しており、焼土や炭化材、遺物の集中と重複していた。同じく末葉の^{みさわ}美沢 3 遺跡では、住居に囲まれた範囲に楕状盛土が形成され、土坑墓、焼土と重複していた。

4. 縄文時代前期の盛土遺構

前葉は、石狩低地帯～胆振日高地方を中心に、北部・東部でも確認される。楕状盛土や斜面盛土が形成され、一列带状例（^{ひやみず}冷水遺跡・^{こばやし}小林遺跡）もあるが、集落との関係は不明なものが多い。^び美々貝塚北遺跡では、広場をコ字形に囲んだ土手状盛土が形成される。北海道での顕著な盛土遺構の嚆矢である。

中葉以降は、南西部に分布の中心が移る。中葉の^{やぎ}八木 A 遺跡で二列带状の土手状盛土が形成され、盛土中に墓が構築される。一方、^{かまや}釜谷遺跡・^{たての}館野 6 遺跡では楕状盛土や斜面盛土が形成される。^{やまざき}山崎 5 遺跡では、削平された土壤が斜面に堆積していた。後葉になると、楕状盛土の上位から住居を構築し、廃絶後埋土する（^{たてさき}館崎遺跡・釜谷遺跡・^{やまざき}館野 6 遺跡・^{はまなす}ハマナス野遺跡）。また大規模な斜面盛土も形成される（^{へびない}蛇内遺跡・^{さいべい}サイベ沢遺跡）。末葉～中期初頭では土器が多量に廃棄された土手状盛土が带状に形成される。二列例は、^{まつしろ}松城遺跡・館崎遺跡で、一列例は^{さかえはま}栄浜 1 遺跡・^{すつつ}寿都 3 遺跡で確認される。

5. 縄文時代中期の盛土遺構

中期前・中葉の分布も南西部中心だが、石狩低地帯や礼文島でも確認される。廃絶住居埋土が主となる（^{やまざき}館野 2 遺跡・^{さかえはま}栄浜 1 遺跡）。また斜面盛土も存在する（^{やまざき}館

崎遺跡・^{さかえはま}栄浜 1 遺跡）。館崎遺跡では、前期末葉～中期初頭に形成された土手状盛土に沿って住居が構築され、廃絶・埋土・新築を繰り返すので、盛土層中に住居が存在したようにみえる。

後葉になると、盛土遺構の分布は石狩低地帯中心になる。^{かきのしま}垣ノ島遺跡や^{ほりかつぶ}掘株 1 遺跡、^び美々 4 遺跡などにおいて一列带状の盛土遺構形成が確認され、後期初頭ま

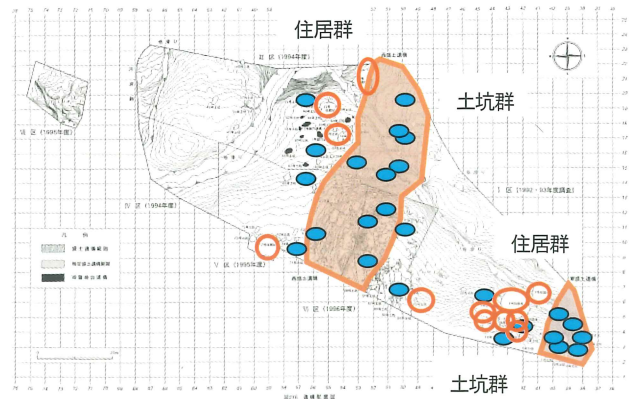


図 5. 函館市八木 A 遺跡

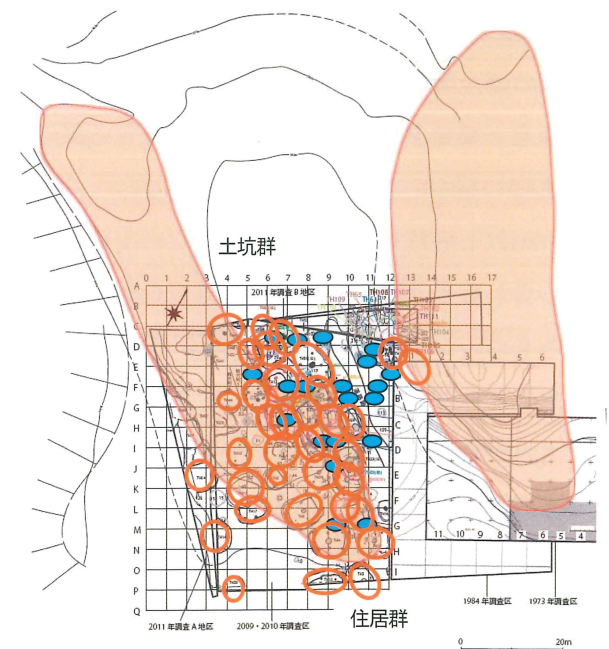


図 6. 福島町館崎遺跡

で継続する。廃絶住居埋土を含む。^{はぎがおか}萩ヶ岡遺跡のように大規模な斜面盛土を形成する例もある。

6. 縄文時代中期末葉～後期初頭の盛土遺構

集落を挟むような二列帯状の土手状盛土が、南西部の遺跡で確認される（^{もべつ}茂別遺跡・^{おしあげ}押上1遺跡）。さらに発達して、中央を広場とし、コ字形を呈するものも現れる（^{垣ノ島}垣ノ島遺跡・^{美々3}美々3遺跡）。盛土形成は、廃絶住居埋土を起点としながらも、広場の削平が顕著になり、整地もされるなど、計画的な配置がなされたとみなせる。また、盛土中に墓が構築されなくなり、ヒトとモノが明確に区別されるようになる。

一方、東部では、住居に囲まれた範囲に住居廃土を集積して、楕状盛土を形成する。盛土中には、柱穴、炭化柱材が確認され、住居が構築されたとみられる。この傾向は前葉まで継続する。

7. 縄文時代後期前葉の盛土遺構

南西部の^{たての}館野遺跡、^{いしくら}石倉貝塚では、広場、列石、掘立柱建物・土坑群（墓域）、盛土遺構が重層的に配される。館野遺跡の盛土遺構は厚く、全体形状はコ字形～楕円形を呈する。石倉貝塚の盛土遺構は薄く、全体形状は環状を呈する。館野遺跡は集落を起点としているが、石倉貝塚では集落は確認されない。

徐々に盛土遺構と列石・墓域は分離していく。小規模列石と土坑群（墓域）が検出された^{くちがわうがん}倉知川右岸遺跡での盛土遺構は痕跡程度になっている。日本海側の都遺跡では集落に伴い盛土遺構が形成される。

^{わしき}鷺の木遺跡では環状列石に盛土は伴わず、墓域も分離する。同時期、^{しんみち}新道4遺跡では弧状の土手状盛土が形成され、内側の削平範囲に大型柱穴が30基以上確認される。土坑墓もあるが同時期が不明瞭である。

東部の^{てんねる}天寧1遺跡では、低地を埋め立てるように楕状盛土が形成され、貝層も堆積していた。ここでは屈葬人骨が検出された。また住居が盛土中に存在した可能性がある。東部では、南西部で廃れた古い要素が残存していたとみられる。

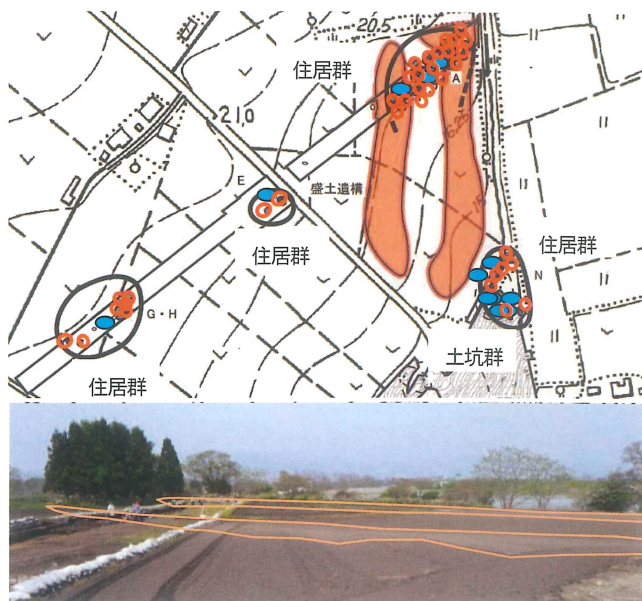


図7. 北斗市押上1遺跡

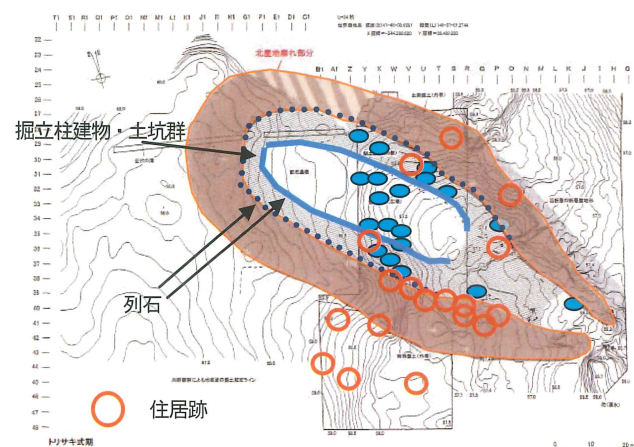


図8. 北斗市館野遺跡

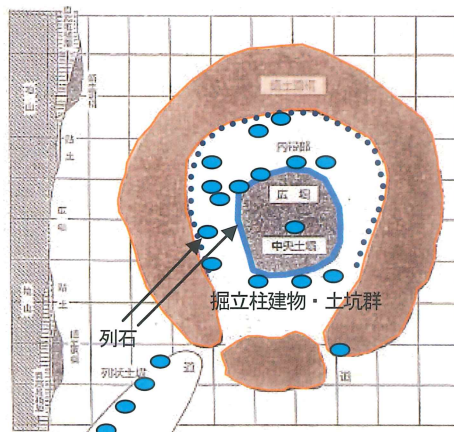


図9. 函館市石倉貝塚

8. 縄文時代後期中～後葉の盛土遺構

分布の中心は石狩低地帯となる。この時期は低地に斜面盛土を形成することが多く、塩谷^{しおや}6遺跡、西島松^{にししまつ}5遺跡、内園^{うちぞの}6遺跡などがその好例である。

キウス4遺跡では、集落を囲む二列帯状の楕状盛土が形成され、周堤墓群と接続する。末広^{すえひろ}遺跡、西島松5遺跡では一列帯状の楕状盛土が形成される。

美々4遺跡では、地面に安置した遺体を、副葬品と共に覆土した盛土墳墓が存在する。盛土遺構への埋葬の流れを汲むものとされる。集落との関係が不明だが、周堤墓を中心とした墓群に隣接している。

9. 縄文時代晩期の盛土遺構

集落が不明瞭になる時期で、墓群に伴って盛土遺構が形成されるが、規模は小さい。斜面盛土（天寧1遺跡）、前代の廃絶住居への埋土（新道4遺跡・大平^{おおひら}遺跡）、不整楕円形の楕状盛土（聖山^{せいざん}遺跡）、墓群に隣接した斜面盛土（朱太川右岸^{しゅぶとがわうがん}6遺跡・共和^{きやうわ}遺跡・柏原^{かしわばら}5遺跡・朝日^{あさひ}遺跡）、墓群に重複した楕状盛土（美沢^{みさわ}・東6遺跡）などがある。

10. おわりに

北海道の盛土遺構は、廃棄物の集積として形成された。廃土も集積しているが、廃棄物を覆うことを目的にしたと考えられる。一部の土手状盛土で集積が進行すると、人為的凹凸地形が顕著となる。人為地形は、中期までは形成期間が長く、結果的に形成されたと推定され、後期では形成期間が短く、広場も整地されるので、計画的に形成されたとみられる。

盛土遺構の形態は多様性を示す。北海道の縄文時代の集落は、広場を維持する環状構造例や、直線状構造例は少ない。後期前葉の環状構造を示すものは、本州の影響を強く受けた可能性がある。恐らく集落形成範囲の制約はあったが、広場維持といった継続的な配置規制はなかったものと考えられる。集落が維持される中で、刹那的な配置制約があり、その過程で盛土遺構の配置も決定されたために、多様性を示すに至ったと



図 10. 釧路町天寧1遺跡

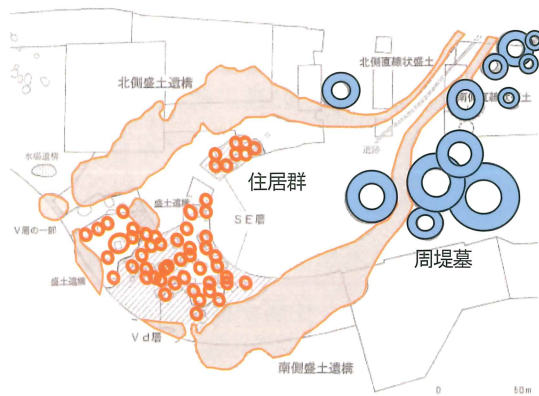


図 11. 千歳市キウス4遺跡

考えている。

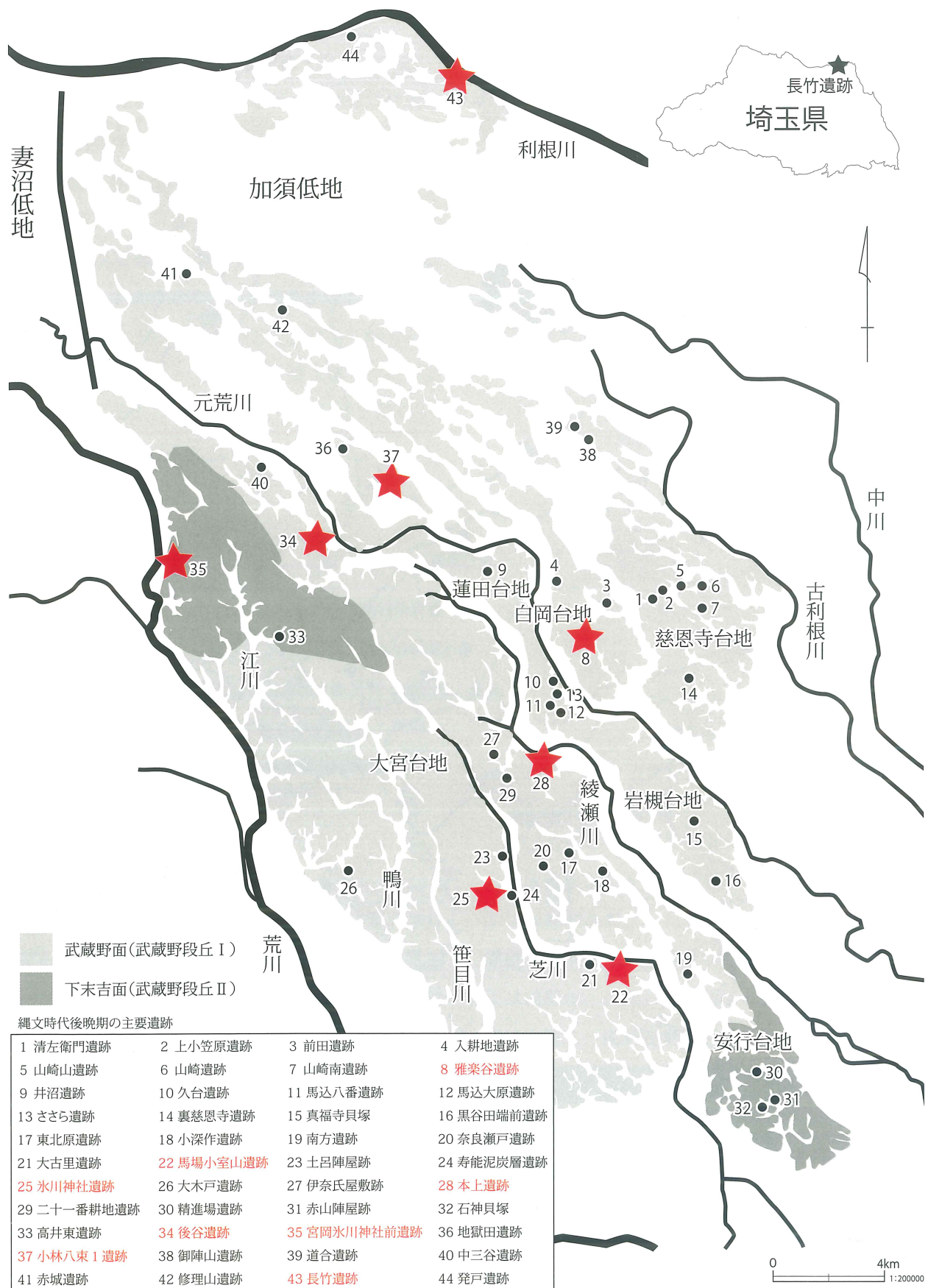
盛土遺構と住居構築の関係として以下の例がある。

- ①楕状盛土上位から住居構築し、廃絶後に埋土する、
 - ②住居廃絶後埋土し、その上位や横位に住居構築し、廃絶後埋土する、
 - ③盛土上に住居構築する。しかし、
- ①は前期中・後葉の南西部、②は中期前葉の南西部、③は中期末～後期前葉の東部と限定される。

むしろ北海道の盛土遺構は、廃絶住居などの窪みや斜面に象徴される「あの世の入り口」と繋がった「万物の墓」という機能が強かったものと解釈できる。そして、洞窟内の人為堆積も同様なものと理解できる。そのために、後期では集落や墓域の「境界」の役目も果たしたとみられる。

文献

村本周三・福井淳一・大泰司統・影浦覚・工藤研治・山谷文人・石川朗・辻本裕也 2014『北海道考古学会 2014 年度研究大会 盛土遺構を掘る 予稿集』
福田裕二・阿部明義・富永勝也・福井淳一 2014「北海道の盛土遺構」『日本考古学協会 2014 年度伊達大会研究発表資料集』



埼玉県大宮台地周辺の縄文時代後・晩期の遺跡

井野長割遺跡国史跡指定10周年記念シンポジウム

縄文時代のムラと盛土

発行日 平成27年2月7日
編集・発行 佐倉市教育委員会文化課